

大地の芸術祭実行委員会（新潟県十日町市）

現代アートを活用して

地域資源を世界に発信！

大地の芸術祭実行委員会
実行委員
（十日町市産業観光部長）

山岸 航



1. 越後妻有地域の概要

大地の芸術祭やその関連事業を展開している越後妻有地域とは、新潟県十日町市と津南町の2市町を指し示す俗称として用いられています。

大地の芸術祭開催当時、歴史や文化も異なる合併前の旧6市町村（平成17年に5市町村が合併し、新十日町市が誕生）が、この地域全体をどのような言葉でまとめたらよいか議論を重ねた結果、この名称が生まれました。「妻有（つまり）」という言葉の由来には諸説ありますが、奈良時代から戦国時代まで続いた荘園制の名残りの名称「妻有荘（つまりのしょう）」や、「どんづまり（この地域の景観や位置を差して）」などが由来とされています。

面積は東京都23区より広い、約760k㎡。このうち、3分の1が落葉広葉樹林の原野、山林が広がっています。中央部には日本一の長さを誇る信濃川が流れ、四季折々の美しい自然景観を楽しむことができる地域です。



星峠の棚田

この地域は世界有数の豪雪地帯で、毎年2m～3mもの積雪量があります。高齢化率が国や県平均より高いこの地域では、雪は日常の住民生活を不便にし、雪崩や雪害などの被害を及ぼします。反面、春には水田を潤す貴重な資源ともなります。

越後妻有地域には、このような豊かで厳しい自然環境と生活環境の中で生き抜くための知識や文化、歴史が蓄積されています。

2. 活動開始の背景・経緯

大地の芸術祭やその関連事業が始まるきっかけは、新潟県の施策「ニューにいがた里創プラン」でした。

これは、平成6年に提唱されたもので、これまでは県内の各自治体がバラバラで独自に地域活性化施策を実施していたところを、広域で連携したテーマを施策とする場合に、ハード整備及びソフト事業支援を行うというものでした。十日町地域の当時の6市町村はこの第1号認定を受け、試行錯誤しながら、アートをテーマにした地域づくりを行うことを決定しました。

こうして平成7年には各地域の特色をアートで結びつけるという「越後妻有アートネックレス整備構想」がまとめられました。

3. 里創プランによる各種事業展開

越後妻有アートネックレス整備構想では、具体的に4つの事業が展開されました。

■越後妻有8万人のステキ発見事業

地域の自然や文化がもともと持っている魅力を再発見するための写真と言葉のコンテストです。応募された写真の多くが里山の自然や田舎の日常風景を写したものでした。

■花の道事業

道路などに花を植えることで広域圏をつなぐ事業です。道路整備や公園づくりなどを含めた総合的な景観形成と、各地域の特色を活かしたインフラ整備の推進を並行して進めました。

■ステージ整備事業

地域の特性を活かしたコミュニティの核として、また、地域の交流拠点として整備されたステージには、各地域の特性に沿ったテーマが設定されています。その機能は、ハコモノ行政への反省から、広域連携のもとに相互に補完しあうように考えられました。

■大地の芸術祭

地域住民とアーティストが協働で活動し実施する、アートネックレス整備構想の成果を発表する場として、平成10年に「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」が企画されました。

地域や集落に入ったアーティストは、その「場」に存在する様々な課題（地球環境問題のような大きなテーマから、集落の過疎高齢化問題など幅広い）を掘り起こし、また、住民と協働で作品制作に取り組むことで地域の魅力等を再発見します。そして人々の興味を引く仕掛け（＝アート作品）を制作することで、「場」を人々に意識的に見せていきます。

大地の芸術祭は、越後妻有アートネックレス整備構想の最も重要かつ大きな計画として実施され、現在も第5回展に向けて計画が進行しています。



2009年：大地の芸術祭開会式

4. 地域住民の理解とこへび隊

今こそ大地の芸術祭によって多くの観光客が訪れ、自らおもてなしなどで活動する住民も増加していますが、当時はアートという奇抜な発想に税金を投入することについて、反対する方が多くいました。その税金を、なぜ福祉や道路に使わないのかという意見です。

大地の芸術祭は、作品を単に野外に設置していく事業ではありません。地域住民と協働作業により作品制作や展示場所を決め、さらにはアーテ

ィストや来訪者との交流を生む地域活性化施策という点で、通常のアート館とは異なります。住民の理解を求めるために、第1回展開催当時は、説明会などに奔走しました。

それでも協力してもらえぬ地域や集落は数件程度だったため、第1回展は集落内の作品は少なく、公園や山の中などに展示される作品が多いという状況でした。

そんな中、大学生、社会人など年齢層や職種等も幅広い、大地の芸術祭のサポーター集団である「こへび隊」が地域で献身的な作品制作活動を行いました。一生懸命にボランティアで働くこへび隊を見た地域住民は、助けたいという思いから手伝いに参加し始めます。それから約10年が経ち、2009年の大地の芸術祭では、参加集落が92集落まで増加しました。そして、作品制作や展示をする会期中はもちろんのこと、雪掘りや田植えなど、こへび隊と通年に関わる集落や人々もいます。

また、地域住民が直接作品制作に関わることで、作品の説明を住民ができるようになり、住民による温かいおもてなしとして好評をいただいています。



住民やこへび隊の作品制作作業

5. 様々な団体や人との繋がり

アーティストはディレクターの選出、もしくは公募により選ばれます。選ばれたアーティストは現地を訪れて、集落の要望や課題などを聞きながら作品制作に取りかかります。

作品制作は住民が理解し、協力しなければ成り立ちません。アーティストと住民、住民とこへび隊、そして住民同士が協力し合い、時には地元の祭りなどに一緒に参加するなどの交流をしながら作品が制作されていきます。アーティストの中には、会期後も地域や集落と関わりを持つ方もいます。

例えば、閉校した小学校を活用し

て「鉢&田島征三・絵本と木の実の美術館」を制作したアーティストの田島征三氏は、大地の芸術祭会期後も1か月に1度は美術館のある鉢集落を訪れ、イベントや交流をしています。住民と次回作の構想を楽しく話し合うなど、地域にとって大切な存在になっています。

蒔苺（あざみひら）集落では、アーティストの日比野克彦氏が作品の「明後日新聞社文化事業部」を拠点として、集落の夏の盆踊りや冬の小正月などの地元行事に関わるようになりました。

また、作品制作に大学が関わっている地域もあります。星峠集落の日本大学芸術学部や枯木又集落の京都精華大学などがその例です。

松之山浦田地域では2009年に、オーストラリアとの恒常的な交流拠点としてオーストラリアハウスが誕生し、オーストラリアとの関わりが強くなってきています。今年7月には、オーストラリア政府の連邦・州政府省庁の視察団も訪れました。また、8月にはオーストラリアの作家や学生が滞在するレジデンスプログラムも行われました。



オーストラリアハウスでの交流

津南町の穴山集落では、大地の芸術祭がきっかけとなり、今年5月に台湾の2村と「姉妹芸術村」協定を結び、国際交流がスタートしました。さらに、7月には「津南あ〜ともりあげ隊」が有志で発足し、津南エリアの恒久作品の整備、独自の案内地区の作成や芸術祭関連グッズの販売などを計画しています。

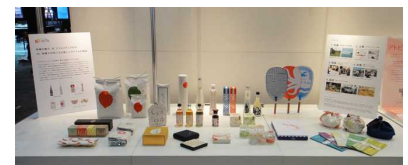
このように様々な方々が大地の芸術祭に関わり繋がるのが地域活性化への第一歩であり、今後もこのネットワークを広げていく必要があると考えています。

6. NPO 法人発足と関連事業の展開

NPO 法人越後妻有里山協働機構は、

大地の芸術祭が契機となり、地元の主体形成や芸術祭の自立に向けて設立されました。地域内外の方から組織され、芸術祭はもちろんのこと、グッズ開発や棚田保全などの活動にも取り組んでいます。なかでも、強い発信力を持った商品開発を望む地元事業者と、自らの創造性を発揮する場を求めるクリエイターがマッチングした「Rooots 名産品リデザインプロジェクト」は、「2010年グッドデザイン賞」を受賞するなど、県内外から高い評価を受けています。今後も地域産品を多方面に発信していくことになると考えられます。

このように、大地の芸術祭は様々な分野へ波及する可能性を秘めており、大地の芸術祭そのものや、そこから生まれたつながりをどのように活かしていくかが重要になると考えています。



Rooots 名産品リデザインプロジェクト

7. 課題と展望

大地の芸術祭が2000年に開催されてから10年が経過しましたが、まだまだ様々な課題が残っています。

1つ目は、安定的な事業費の確保です。行政からの歳出予算も限られるなか、安定した寄附・協賛金の確保と来場者のパスポート収入が必要です。

2つ目は、既存作品の維持管理です。現存する作品は150点以上で、なかには10年が経過した作品もあり、今後のメンテナンスが欠かせません。

3つ目は、最も重要な課題と考えていますが、より地域全体で芸術祭が盛り上がるようにすることです。回を重ねるごとに多くの地域や集落が参加しているものの、まだ未参加な地域もあります。多くの方に関心を持っていただき、それを広げる必要があります。

これらを念頭に、まずは2012年の第5回展、さらにはその先も活動を進めていきたいと考えています。